

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から

石井敏夫コレクションより 第41回

白木屋ホテル全景(本店は伝馬町にあり、宇都宮ホテル白木屋本店を名乗った)



白木屋ホテル

日本鉄道会社による大宮―宇都宮間の鉄道敷設に伴い、宇都宮駅が開業したのは一八八五(明治十八)年のことである。しかし、開業当時は、一日の乗降客わずか六十人余り。市街と駅を結ぶ通りもなく、あたりは田川東岸の原野そのものであったという。

通。日本鉄道会社の収支報告によれば、九三(明治二十六)年には上野、仙台に次ぐ運賃売上を誇った。(『昔日の宇都宮』 壺静夫／随想舎)

宇都宮駅の発展は、駅前の整備、商業の活性化を促した。旅行者客あての宿泊施設や飲食店、貨物輸送業者などが次々と店を開き、日本最初といわれる駅弁が白木屋旅館の駅前支店によって売られた。梅干しに黒ごまをかけたおにぎり二個とたくあんを竹の皮に包んだものに「汽車弁当一金五銭也 明治十八年七月十六日 本舗白木屋謹製」と印刷された掛け紙が掛けてあったという。この駅弁は、白木屋旅館の主人斎藤嘉平が、宿泊した日本鉄道会社の重役に勧められて始めたものといわれる。

石井敏夫氏所蔵の『宇都宮繁昌記』(春圃居士)は、明治三十年ごろの駅前を次のよう描写している。「停車場外、客待の車夫、彼処一列、此処に一班、乗車を勧めて五月蠅き潮の湧くに似たり。(中略)夜に入れば『白木屋』『てのじ』など記せる提灯振り照らして客引きに忙しく(後略)。また、池田運送店、丸七運送店、など運送店の名前が続き、



大社通りの二代目宇都宮駅と白木屋ホテル(左)

「店前貨物積んで山の如く」と記されている。さらに「御休所、御酒肴の看板を掲げたる軒、煙草屋銘酒店あり景気宜し」と結んであることから、今日に勝る賑わいだったのに違いない。

また、同書の「旅舎」の項では伝馬町の白木屋旅館を次のように紹介。「客を遇する丁重にして、注意周到也、紳士豪商茲に宿す、又外国人の来り泊するを見る、支店を停車場畔に設け頗る繁盛を極む、市中一位の旅舎と為す(後略)」。白木屋ホテルは、のちに白木屋旅館駅前支店を改装したものである。洋風二階建てのモダンな佇まいは、ホテルの名にあふらしいものであった。